

---

# イレギュラーナイト

北町 スイテイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イレギュラーナイト

### 【Nコード】

N2224J

### 【作者名】

北町 スイテイ

### 【あらすじ】

少年は孤独だった。そんな少年は、気づかないうちに恋をしていた。でもその気持ちに気づくのは……あまりにも遅かったのだ。

異世界に召還された少年、でもちょっとした手違いで彼は召還場所とは別の場所に召還されたため記憶をすべて失ってしまった。そんなこんなで、魔王の右腕になった少年の話。

## ハルバン（前書き）

こんにちは、これから頑張るので、意見や感想バンバン贈ってください。

できれば新キャラの意見もいただけると嬉しいです♪

## ハルバン

「ハルバン」

そこはとある地下室。そこにはハルバン王と魔術師10人ほどがなにやら儀式のようなものを行っていた。

「ハルバン王まもなくです」

その中でも特に老けているフードの男は、ハルバン王に振り向きおもむろに言った。この儀式が成功すればこの国は救われる。この勇者の儀のためにハルバン王は多くの犠牲を払ってきた、その努力がついに報われるときが来たのだ。

「聖剣の方は用意した、後はお前たちしだいだ」

丁度そのとき

『て、敵襲だあ!』

外から大きな音が聞こえ城が揺れる。

「まずい!! 儀式をやめろ!」

フードの男は、儀式を止めようとしたが、すでに手遅れだった。術式はすでに完成していたのだ。

「ど、どうしたというんじゃ!」

ハルバン王は、慌てた。何が起きたのだと。そんなことがあったまるか、この日のために、どれだけの時間を費やしたか……。

「勇者は……召還されてしまいました」

「それはまことか!!どこじゃ、どこにおるんじゃ!!」

ハルバン王は、ようやくこの国が救われると喜んだ。しかし、次のフードの男の言葉で、彼が絶望する。

「わかりません」

ハルバン王は何を言われたかわからなかった。しかし時間が経ち、その言葉の意味を理解すると

「なんてことだ」

この国の未来は、どうなってしまうのだろうか……。

## 魔王城（前書き）

遅れました。

## 魔王城

人は夢を見る

淡い夢の中で、何を見ているのか、目覚めたら、泡のように消えて  
いる

魔物は夢を見ない

ただ暗いだけの時間を、孤独として過ごす

ならばオレはどうだろう？オレは夢を見る、見たことのない人、見  
たことのない道具、見たことのない世界・・・・・・オレは、誰な  
のだろう？

く魔王城く

「魔王様！魔王様！！」

あわただしく走る一人の兵、しかしその姿は、人間のそれとは違う。  
形こそ人間だが、よく見るとその顔には肉がなく、骸骨だけがカク  
カクと動いているように見える。

「何事だ」

それに対して、魔王と呼ばれたものは、なんと言い表したらいいの  
だろうか・・・えっと・・・何とか・・・  
・・・姿は美しいのである、腰まで真っ直ぐに伸びた黒髪、そ  
して何もかもを吸い込みそうな真っ黒な目、きつとどんな男も魅了  
できるだろう・・・しかし・・・しかしである・・・  
・・・少し・・・いやかなり・・・残念な体k

「黙れ」

ピ-----（ここからは少しシ

ョッキングなので、音だけでお楽しみください）  
ガタン！

『ちょ、ま』

ドゴッ！ボコッ！ゴツゴツゴツゴッ！！・・・

少々見苦しいお姿をお見せしました。では続きです。



「城の前に、黒髪に黒い衣を着た男が！」

『黒い髪？』

玉座に座る彼女はこの城の主、魔王である。そんな彼女に舞い降りた報告、彼女はこの報告に大きな好奇心を抱いた。

「ほう、そのものは今どうしている？」

「一応捕らえましたが、おそらくこのままほおって置けばいずれ死にます」

「それは・・・まことか？」

魔王は考えた、この世界で黒髪の者は己しかない、それが、自分と同じ黒髪のものであるというのだ。気になる。

「その者をここへつれて来い」

「ま、魔王様！どこそのものかもわからぬものをつれてこいというのですか！？」

「そうじゃ」

「殺してしまえばよろしいではないですか！なぜ・・・」

そのとき、彼女の目が細められ、冷たく言い放った

「つれて来い」

それ以上いうならば殺す、彼女の瞳は、そう言っていた。

## 魔王城（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。

## 出会っちゃった

しばらくすると、部下が一人の男を連れてきた。

しかし、男というには幼すぎた。年は5歳程度だろうか。

「そいつか？」

「そうです」

骸骨の男の言葉に、彼女が満足そうにうなづく。そして少年の近くに寄った。

部下たちはさっきから、少年を訝しげに見ている。その少年は、まるで大きなものに突進されたように、右半分に大きな打撲の痕があり、そこから、おびただしい量の血が流れていた。それと同時に目を引くのは、その格好。黒い服ということは聞いていたのだが、その大きさがあっていないのだ。手足はすっかり隠れて見えなくなっている。まるで体が縮んだかのように・・・。

「おいヒサシ、こいつの手当てを」

「はい」

そこにいるものは驚いた、自分たちが尊敬する魔王が、ただの人間を助けるというのだ。もちろん周りの者は反対したが、彼女がにらむとしぶしぶ黙った。

そのとき彼女は考えていた

（こいつ、闇と光の属性がかなり強い。おまけにほぼすべての属性

の魔力を異常に持っている。育てればいくらでも強くなる。ふっ、面白い拾い物をしたものだ)

これが、魔王と少年の出会いだった。

時は過ぎて10年後

「ライル、ライルう。どこだ、出て来い!!」

オレの名はクリス、といっても、本当の名前じゃない……はずなんだ。なぜなら、オレには昔の記憶がないからだ。何でも魔王城の前に倒れていたとか、そこを魔王様に助けられたらしい、今のオレがあるのは魔王様、つまりライルのおかげなんだ、だから……なんだ……呼び捨てにしたり、蹴飛ばしたり、いたずらしていても……一応……一応、感謝はしているのだ。ただ……なんでもない。

「ライルー!! ライ ブヘッ!」

オレがライルを探していると突然攻撃された。犯人はわかっている

「クリス!! いつも言っているだろう! 呼び捨てはやめろ!!」

この仁王立ちしている、体が残念な美少女こそが俺の探している主、ライルだ。正式には ライル・ブラック このオレの主にして魔王様だ。

「探したぞラ、じゃなくて魔王様」

いつもなら注意されても呼び捨てなのだが、ちょうどそこに魔王隊が来たのであわてて言い直した。

「何のようだ」

「反乱軍のことだ」

さっきまで怒っていたライルだったが、オレの言葉で、真剣な顔に

なる。

「あいつがひきいる、新魔王軍の者が、人間に危害を加えだした。おまけに、その罪をオレら魔王軍に擦り付けて」

オレたちが抱えている問題、このライルに逆らい、あいつがひきいる、新魔王軍ができたのだ。その勢力はそれほどではないのだが、どうやら帝国の誰かと手を組んでいるらしく、自分たちの罪をオレ達になすりつけて、勇者一行にたおさせようとしている。

「なるほど・・・な」

ライルは真剣な顔で考え出した・・・が、しかし・・・

「考えてもしょうがない、昼にしよう」

結局は後回しである、長年付き添ってればなれるが、ここっ引くわけにはいかない。

「魔王様、このままにしておくつもりですか?! ただちに対策を考えなければ、この城を落とされる、それでもいいのですか?」

この魔王城は、オレにとっては家も同然、ここを落とされるのは我慢ならない。ここではオレは厄介者扱いされているが、それでもオレを可愛がってくれる者もいる、この城には、俺の家族もいるんだ。

「今は考えてもしょうがない、食事の後に話し合う。いいな」

ライルの黒い瞳が俺を見据える。俺はそれに従いその場を後にした。





## 出会っちゃった(後書き)

ご意見・感想お待ちしております。

旅に出ます・・・

ここに召還されて、2週間が経つ。どうやら私は、勇者にならなくちゃいけないみたい。そして興味深い話を聞いた、どうやら10年前に、1度勇者の召還をしたらしい。この話を聞いた私は、すぐに勇者になることを決めた。

もしかしたら、あいつかもしれない。

「カナエ様」

どうやら呼ばれてしまったようだ。

私は、キラキラと輝く星空を後にした。

運命は回りだした

彼は記憶を求め

彼女は彼を求める

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／  
／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／  
／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／  
「て、ことで旅に出ろ」

唐突にそういわれた俺、混乱するだろう、なぜなら俺もわからない。  
この魔王様は会議が始まるなり突然そう言ってきたのだ、理解しろ  
というほうが無理だ。

一部の者は俺を哀れんだ目で見ていたが、ほとんどのものが喜んで  
いる、あと約1名は笑っているが。

「なぜですか魔王様」

「貴様、魔王様に逆らうのか」

イケメン面をした奴が嬉しそうに言ってきた。  
マジむかつく。

こいつはカイム。この城で5番目に権限を持っている、といっても  
俺よりは断然低い、俺は魔王の右腕といわれた男だ、じきじきに魔  
王の指導を受けたから死にそうだったけど・・・。

こいつは何かと俺に突っかかってきては、俺を追い出そうとする。  
俺が完全に人化を解けないからって、魔物外れとか呼んでくる。失  
礼な奴だ。でもこの城で人化できる奴の中ではこいつと俺だけが男  
だ。

「まあ待てカイム」

そんなカィムをライルがなだめる。カィムは魔王に弱い、魔王様の命令なら何でも聞く、だからこそ魔王のお気に入り（らしい）俺をけがらしている、ほかの奴らもだが。

「お前には勇者一行を説得してきてほしい」

「説得？」

「そうだ、このままではあいつの居場所さえも掴めない。だから帝国に潜んでいるあいつの部下を見つけるために勇者どもと手を組みたい……不本意だが……」

うわっ、最後本音でてるよ、俺にしか聞こえなかったけど。

「もちろんお前の正体は伏せろよ、いろいろと面倒だからな」

「マジですか」

「マジだ」

ライル、俺が教えた言葉、覚えてくれたんだね。

俺がここに来たとき、俺はほかにも変な言葉をいろいろ知っていたんだ。OKとかナイスとかとにかくいろいろ。

でも今は嬉しくない、そんなの嬉しくない。

「……………」

「……………」

「……………」

「行け」

「・・・・・・・・はい」

こうして俺の旅が始まった。

**旅に出ます・・・（後書き）**

ここ意外と大事な話だよ。

## 自然落下って怖いと思う(前書き)

すいません。家の都合で遅れました。

自然落下って怖いと思う

「ライル」

「なんだ」

「これは何かな」

「仮面じゃが」

そういつてライルは俺に仮面を取り付ける、おまけになんかの骨だし。

「これは神獣の骨だ、きっとお主を助けてくれる。それに・・・」

「それに？」

「顔が見えないほうが楽しそうじゃん」

なにか、こいつは物事をややこしくするのが楽しいといってるのか。なんと厄介な女だ。てかなんか今頭にガシッて感触がした気がするんですけど。

「ライル、なんかガシッてしなかった」

「したよ、この仮面壊れるまで取れないから」

「・・・」



えっ？なにそれ、俺は騙されたの。

グイイ、グイイ

・・・・・・・・・・

と、取れない、本当に取れない。

「何をする！！俺の顔があああ」

「無理に引っ張るな、顔の皮が取れるぞ！」

ああ、俺の顔が、俺の、俺の。そうか、俺は今日からこの顔なのか、もうお嫁にいけない。

「そう落ち込むな、一応壊れるときは壊れるし、仕事が終わったら我が取ってやる」

「本当か？」

「本当だ！！だからさっさと行け！！」

そう言って俺を城から引っ張り出す。

「ま、待てよライル。考えなおそう？なっ？そ、そうだ！！またケーキ作ってやるからさ。」

俺の腕を、グイグイ引き続けたライルの動きが、ほんの数秒だけ止まる。ケーキとは、クリスマス不思議のひとつ『誰も知らない道の料理をなぜかクリスマスは知っている』の、未知の料理の一つだ。ちなみにオレは『肉じゃが』が一番得意だ。

で、そのケーキはとても甘く、上に乗っているチイの実ととてもあうのだ。これはライルの大好物、きつと諦めてくれるはず・・・・

・ と思ったが

「だ、だめだ！……そんなものに引かかるほど我は馬鹿ではない！」

そのわりには、さつきからオレの背中に、大量の謎の液体が垂れていることは、言わないでおく。

「じゃあ、せめてこの仮面だけでも取ってくれ。恥ずかしい！」

「それもだめだ。つまらん！」

その言葉が、終わるか終わらないかの内に、オレはライルに背中を  
思いつき蹴られ、魔王城から放り出された。

「じゃっ♪」

ライルの満面の笑み、いつもは可愛いその笑みも、今は悪魔のように見える。（実際に魔王だが）その理由は、さっきは言い忘れたが、この魔王城は、何を隠そう空の上にあるのだ、それも雲なんかよりもずっと上に。そんなところから放り出されたんだ、もちろん俺の体は重力に従い落下していく。

「このおお!! ライルウウウ!! 覚えとけよおおおお!!」

俺が生きていたならな！

でもそう簡単に死んでたまるか、俺だって魔物の端くれだ、というか、一応魔王の右腕的ポジションにいる存在だ。まず、状況確認だ。下には何がある？

オレはまず頭に重心を置き、下を見る。下が、海とか砂漠とかだったときの対応も必要だからだ。

「うそだろ・・・」

しかし、俺の考えが甘かったことを、俺は思い知ることになった。同時に、こんなところから落とした魔王様に、また悪態をつきたくなかった。

下に広がっていたのは、海でもなければ砂漠でもなかった。

「いきなり大当たりみたいだ」

そこに広がっていたのは、大きな町。白い城に、それを囲むように広がる町。

「ライルの馬鹿」

そこは紛れも無く、『ハルバン帝国』。オレの最終目的地だった。オレはそのまま、帝国のど真ん中に落ちていったのだ。

## 自然落下って怖いと思う（後書き）

久しぶりに皆さんに会えて嬉しかったです。  
ちなみに、皆さんのお気に入りのキャラクターって誰ですか？もし  
よかったら、参考に教えてもらえませんか？

## 捕まっちゃった(前書き)

お久しぶりです。

## 捕まっちゃった

「な、何だあれ!？」

誰かが、オレを指差して言う。オレ的にはやめてほしい、たとえ人間でなくとも、心はあるのだ。指を指されたら、ショックだす。・・今は気にしないで、『だす』ってなんだ? と思っただろ? 俺もそう思った。

しかし、どうしよう。この状態はあまり思わしくない。どうやら騒ぎを聞きつけた、騎士団らしき人々が、群がってきている。俺はその中心でただ呆然と立っているだけ。

「動くな!」

その中で、特に目立つやつがいた。騎士団の証の剣を持つその男は、周りのものとなんら変わりないが、唯一、その顔立ちだけは、とても整っていた。その証拠に、野次馬の半分近くはこの男目当てで近寄ったようで、さっきから恋する乙女の視線を、男に投げかけている。

「貴様、何者だ」

その整った顔立ちとともに、くらくらしてしまいそうなその美声、さっきの声で数人倒れてしまった。恐るべしイケメン!!

そのイケメンは、オレに少しづつ近づいてくる、俺の前まで来ると、オレに手をかざしてきた。

「私は、クリフォード・フランツ。騎士団の長をやっている。」

どうやら、隊長さんだったらしい。あれか、顔なのか、やっぱ顔なのか。

「逃げようとしているなら、やめたほうがいい。それでも私は、かなり魔法うまいよ。自慢じゃないがね」

それは、ポーズを決めながら言う言葉なのだろうか。どれだけ自意識過剰なんだ、いくら顔がよくてもこんな痛い性格じゃ、効果が半減だ。それさえ直れば今以上にもてるだろうな。

「そんな、怪しいものじゃありません」

「そんな仮面をかぶったやつを、怪しくないといいたいのかね、君は」

ごもつともです。でも違うんです、これは魔王に付けられたんです。オレは頑張って言い訳したが、そんなことが聞き入れてもらえるはずもなく、そのまま取り押さえられてしまった。仕方なく騎士団についていった俺だが

「地下牢に入れられたとさ」

「うるさい」

口に出して言ってみたが、うるさいと言われてしまった。どうしたことか、もう四日近く牢に入れられている。だんだん飽きてきた。そもそも、なんでオレは捕まったんだ、ただ、怪しい格好をして空から降ってきただけなのに……

・・・十分怪しいな、オレ。

にしても長い、遅くても次の日には出れると思っていたオレには、ちと長すぎる。いっそのこと、脱獄でもするか？

そんなことを考えていた、矢先だった。牢屋の扉が突然開いたのだ。そこから現れたのは、なんと、イケメンフランス君

「やあフランス君、ご機嫌はどうだい」

「王がお呼びだ。それから私となれなれしくするな」

あれ？オレ王様に呼ばれちゃった。知らないうちになんかやらかしちゃった？このまま処刑台にレッツゴー？

まあ、考えてもしようがないので、おとなしく付いていく。王の間までの廊下は、かなり長かった。途中には、煌びやかな色彩の飾り物が数多くあり、とても目がチカチカした。俺の前はフランス君が、鎧同士がぶつかる音を響かせながら歩いている。

「ここだ」

そして、ドデカイ扉の前で止まり、二度ドアをノックする。すると向こうから「入れ」と聞こえた。重い扉が開かれていく、そのドアの隙間からは、おびただしい光が入り込み、さっきの廊下以上に俺の目をチカチカさせた。

「そちが、空から降ってきたというものか」

「はい」

入っていきなりの質問、つい反射的に答えてしまった。別に答えてどうにかなるものでもないが、なんだか悔しい。それにしても何だ、



このいかにも王様みたいな野郎は。

オレはこいつが気に入らない、その人を見下したような目が、とても嫌いだ。

「ワシには普通の少年に見えるのじゃがの、本当にこのものが魔法を使えるというのか？」

「間違いございません。このものからはかなり大きな魔力が感じられます。」

「そうか、そちが言うなら真実なのだろう。このものを加える、それでいいな」

「はい」

何だろう？オレ抜きで勝手に話が進んでいる、一体何の話だ。

王は、突然立ち上がり、オレを指差す。

「そのもの、名は」

「クリスです」

「家名は」

「ありません」

「なら、クリス、このハルバン王からの命令だ。

勇者カナエ一行とともに、魔王成敗の旅をしろ」

そのハルバン王の有無も言わせない命令に、オレは目を丸くするば

かり  
だつ  
た。

**捕まっちゃった(後書き)**

レッツトライ!!

カナメの性格はやっぱりツンデレかな？

## 条件出して何が悪い！

意味が解らない、なぜオレが勇者さま一行と、魔王<sup>ライル</sup>を倒しに行かなくてはない。

「王、意味がわかりません」

「そのままの意味だ。」

「しかし、オレはか弱いただの旅人です」

これは嘘ではない、一応世界を回るつもりだったんだ、だから嘘じゃない。

しかしどうしたものか、今更自分は魔王の使いとか言いづらいし、べつにこのままでもいいんじゃないかな。オレまだ落とされたこと許してないし。ちょっとくらい危ない目にあっても、許してくれるだろう・・・たぶん。

「嘘を言うな。お主からは、強大な魔力が感じられる。魔法士、それもかなりの腕のはずだ。」

ちよっとお、王様の隣の人！君ですか、余計なこと言ったの。おかげでややこしいことになっちゃったジャン！

オレは、王様の横にたたずんでいる老人を見た、かなり年を取っているらしく、白髪の髪が生え放題な顔をしている。オレの中じゃ、こいつが怪しいと思う。きっと『あいつ』につながっているに違いない。だって、見るからに怪しいし、王様がかなり信頼してるっぽいし。

でも、確信があるわけでもない、もう少し様子を見ないと、万が一・

・万が一！違ったときに、ライルが困ると思うから、ここはもう少し調査するか？。

でもどうやって調査するか、それが問題だ。はっきり言えば、オレは勘で生きている男だ、頭を使うのは得意じゃない、考えて行動はするが、どちらかというと、勘のほうが当てになる。そのオレの勘が、今は勇者について行けと言っているんだ。きっと何かあるはずだ。

それに・・・

そんなことより、どうやら王様がオレをじっと見ているようだから、返事を差し上げないと。

「わかりました。その代わり、条件があります。」

「条件とな、この王に向かって。」

王様は、おかしように少し唇の端を上げた。その笑みは、王を思わせる、毅然としたものだった。

「はい。」

その王様の笑みに、臆することは、俺に限ってありえない。そしてオレはまっすぐに王を見る。聞こえるのは、周りのざわめきと、鳥のさえずりだけ。そんな沈黙を先に破ったのは、王だった。

「いいだろう、主の条件のもうではないか。」

オレは思わず笑いそうになった。こんなに簡単に、受け入れてもらえるなんて、なんだか可笑しかった。オレが出した条件、それは・  
・



**条件出して何が悪い！（後書き）**

本編に入りたい♪

## 動き出した運命

「ああ、疲れた。」

思わずそんなことを言ってしまうほどに、王とのやり取りは俺の体力を削った。あんなに疲れるくらいなら、次からタメ口でいいのではないだろうか。今は気が遠くなるほど長い廊下を歩いている。

「大丈夫か少年。」

隣を歩く鎧を着た綺麗なお姉さんに話しかけられた、この人はハルバン王国を守る騎士団副隊長シャロウ・ラルドらしい。かなり綺麗な人で、オレは惚れてしまいそうです。

おまけに、かなりいい体格している、ムキムキじゃなくて興奮するほうの。

クリスの視線は自然に程よい大きさの二つの果実に向いてしまう。

「何処を見ている。」

廊下の温度が下がる、されどオレの視線は変わらず、男の本能に忠実であった。男とはおろかな生き物だと俺は思った。

「まさか、王に『自分に行き先を決めさせろ』というとはな、正直驚いた。」

「……まあ。」

「またなんでそんなことを。」

今のオレの姿をライルに見せたら、大笑いするに違いない。仮面はさすがに痛そうだったのだろう、顔面に攻撃はこなかったが、俺の体はボロ雑巾のようだ。にもかかわらず、シャロウはまるで何もなかったような振る舞い、オレは寂しくなんかない。

「気まぐれです。」

シャロウは納得していないようだが、そうかといってそれ以上は何



も聞かなかった。

オレが王に出した条件、それは行き先をオレに決めさせてほしいというものだった。どうせ魔王城の場所などわからないのだから、王が断ろうとも難癖付けて飲ませるつもりだったが、あっさり認めてくれたので、それほど苦労はしなかった。これで俺の好きなときにライルと対決できることになった。まあオレは戦わないけど。

「ここだ。」

シャロウが歩みを止めたので、オレもそれに合わせて歩みを止める。目の前には、「これ、一人で開けられるの？」と聞きたくなるほど大きな扉があった。王の部屋の扉より大きいのではないだろうか。シャロウは、その扉を2回ほどたたき「だれ？」という問いに「シャロウです。」と答えた。はじめの声は少女のような声だったと思う、オレと同じかそれ以下くらい。そしてその声は入っていいと返事を出した。

返事とともに扉が自分でゆっくりと開き、オレたちが入るとまたゆっくりと閉じた。

「ッ！」

中に入り、その奥にいた少女を見た瞬間、オレの時間は一瞬止まった。なぜかは解らない、しかし、目の前の少女が、どうしようもなくオレの心を揺さぶった、軽い吐き気に襲われたオレは膝をついてしまった。

「大丈夫か!?!」

シャロウが慌ててオレを受け止める、そのときにやわらかいものがぶにっしてした。ぷにっしてした。

仮面中のオレの顔が、にやけてしまった。それがいけなかった。さいわいシャロウには見えなかったが、目の前の少女に見られてしまったのだ。

「シャロウ、ちょっとそいつから離れてくれる。」

今俺の目には、溢れた魔力がよく見える、綺麗だな。

シャロウは危険を感じたようでオレからすぐに離れる。

「イカズチよ…」

何だろう？ いやな予感がする。気のせいだよね。気のせいだよね。気のせいだよね。気のせいだよね。!!。

「逝けええええええええええ!!」

「字が違ううううう!!!!」

その日オレは星になった☆

**俺の頭の命運はいかに!! (前書き)**

勉強で時々の更新ができませんが、お暇なときにも読んでもらえ  
ると嬉しいです。

## 俺の頭の命運はいかに!!

「すみません、もうゆるじでください。」

俺は今、この部屋に居た少女に頭を足蹴にされていた。外れないと言われていた仮面が、みしみしいっているのは気のせいですよね。

「この変態が、あんたのような人間は生きている価値なんてないわ。潔くここで死になさい。」

あんまりです。悪いのは、教育上よくないほどにけしからん体をしているラルドさんのほうなのに。  
ぐり!

「があああ。」

思い切り足に力入れましたよね!?!。あなたは人の心が読めるんですか?!。そしてそのピンポイントに仮面の特に顔に当たる部分を押し込むやめてー!!。痛いです!。マジもう無理です!!。

「カナエ様、もうその辺にしないと死んでしまうぞ。」

ラルドさん、あなたは天使です。俺の目に浮かんだん涙は本物です。俺は一生あんたについていきます。

「だめよ。こんなやつは抹消すべきよ。」

だめです!!。こんな死に方だけはしたくない。俺は、こんなところで死にたくない!!。

「私は気にしていませんから。それにその方はクリスマス様といって、カナエ様と一緒に旅をするものです。そんな存外にしないでください。」

「えっ!!。こんな奴と旅をしろって言うの!!。」

カナエという少女は、本当にシヨックだったらしい。少なくとも、俺を蹴ることを忘れるくらいには…。

「今すぐこいつを死刑にしよう、それで万事解決よ!!。」

「まってえ!。スンませんでした!。自分調子に乗っていました!。」

カナエの言い放った言葉に俺はすばやく反応して、すぐさま正座をして謝りまくる俺。こんなところで死んだらライルにアンデットにされる上、一生いたぶられる事になる。そんなことになったら俺は正気でいられる自信がない。

あのライルの拷問を一生受け続ける自分を想像して、俺は身震いをした。

「彼もこう言っていますし、許して差しあげたらどうですか。カナデさま。」

ああ、もうすでにラルドさんが天使を超えて神に見える。

「……………」

カナエさんは何も答えてくれないのですか……。

「仕方ないわね、今日はシャロウに免じてこのくらいにするわ。」

俺は助かったのか……………。

俺はその日生きることのすばらしさを知りました

「で、このゴミと旅をするとして。」

俺はゴミなのですわね。

「こいつ役に立つの?。」

「これでもかなりの魔力を保有している。」

ラルドさん、あなたにとっても俺は『これ』なのですね。

俺はカナエの悪意ある攻撃と、ラルドさんによる無意識の攻撃で、心に大きな傷を作りました。

今俺は、ラルドさんとカナエに挟まれそれはもうおとなしく二人の会話を聞いている。時々カナエによる心への攻撃が痛い、慣れればそんなもんだと諦めがつくので大して問題でもない（不本意だがな）。

今話しているのは、俺が戦力になるか否か、しかしまあその辺はばれているので問題ないと思っていた俺だが、どうやらカナエは納得できないらしく、半信半疑というところだ。だがしかし、今からメソバーを変えることはカナエにもできないらしく大きなため息をして「自分のみくらい自分で守りなさいよ。」

と、完全に俺を見くびりながら言い放った。でも、その裏では彼女が自分で守ろうとしてくれていると、俺はなぜかわかった。理由はわからない。だけど、心のどこかが教えてくれた。カナエはね、やさしいんだよ。カナエはね、照れ屋なんだよ。と、教えてくれたんだ。

**俺の頭の命運はいかに!! (後書き)**

次はいつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2224j/>

---

イレギュラーナイト

2010年10月11日11時47分発行